

巻頭言

Kan・Tou・Gen

里山とつきあう

写真家 今森光彦

今から30年ほど前の話のだが、古都、大津の町なかにある三井寺から坂本へつづく山づたいの道を車で走り、そのまま、琵琶湖岸をとおらずに漁師の町、堅田にでようとした。そのとき、集落の網の目のようにつながるややこしい農道に入ってしまった。これが、私と棚田との出会いである。

迷った農道をそのまますすむと急にのぼりになり、墓地が見えた。墓地は、こぶのような丘にあり、私は車をそのわきにとめて、墓地のいちばん頂上へかけのぼった。墓地のてっぺんから見下ろす風景をみて私はほんとうに驚いた。山のすその谷に段々状の田んぼが重なり合っていたからだ。9月の稲刈りシーズンともあって、黄金色の海原に、人がぼつりぼつりと仕事をしていた。谷を仕切る尾根の向こうには、雄々とした比良山が遠くにかすんでいる。視線を山の反対側に向けると真つ青な琵琶湖が顔をのぞかせていた。里、山、湖という里山の三要素とでもいうべき光景が同時に視覚に飛び込んできた。そのとき、自分の生まれ故郷がこれほどまでに美しかったのかと感動したものだ。

こんな鮮烈な出会いがあつて、とうとう棚田のはずれにアトリ工を構えることになってしまった。田園に長く住みつくつくと、田んぼや琵琶湖のヨシ原までが、今までとはちがつてみえてくる。最近は一昔まえにはあたりまえだった質素な暮らしが見直され、シンプルな生き方を目指す人が多くなった。人と自然の共存というキーワードは、ますますひろがってゆくのだろう。里山とのつき合いは、まだまだだつづきそうである。